2023（令和 5）年度

海外学外研修インド

～インドの亡命チベット社会～

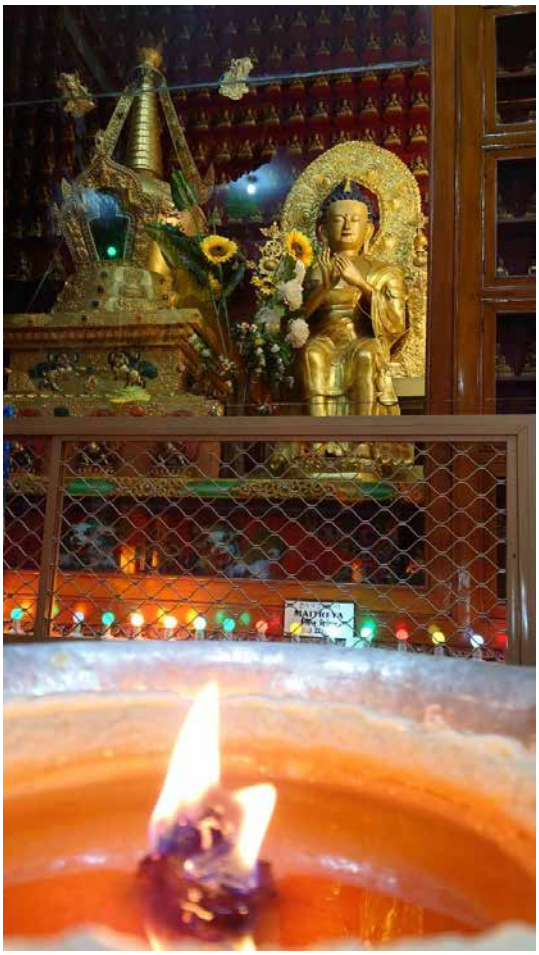
名古屋市立大学人間文化研究科「人間文化研究 H」
／人文社会学部「海外フィールドワーク A」実習報告書

名古屋市立大学

人間文化研究科／人文社会学部国際文化学科

〈目次〉

1．はじめに…… 2
2．自己紹介…… 8
3．授業スケジュール…… 9
4．研修報告 ……10
・インドにおけるチベット定住地でのフィールドワーク報告（豊田朱理）…… 10
・英語教育とチベットのアイデンティティ（水間玲衣）…… 14
・インドフィールドワーク報告（淺井教祥）…… 21
5．次年度受講生へ ……29



はじめに

本報告書は、2023 年度に開講された、名古屋市立大学人文社会学部「海外フィールドワーク A」および同人間文化研究科「人間文化研究 H」の成果報告書である。

【経緯】

2019 年から構想・準備してきた本研修は、コロナ禍で中止を余儀なくされてきたが、やっと本年夏に実現した。コロナ禍停滞を経ての 3 年越しでの実現である。

人の移動は再開されはしたものの、with/after コロナの世界では、国際移動のモビリティが大きく変化していた。コロナ禍対応とその打撃の立て直しを図る航空業界を中心とする財務調整や人員整理の影響で、直行便の廃止に加え、発着便数が減っているために、航空機あたりの搭乗者数は増えていると感じられた。立て直しの度合いは、欧米に比べアジアでは改善の遅れが見て取れた。本研修に関して言えば、with/after コロナの状況下、コロナ以前には存在した名古屋（中部セントレア）とインド南部のベンガルールの直行便は廃止され、経由便も毎日あったものが週 2 日に減線されているため、航空チケットの値段もコロナ以前の倍近くになり、搭乗便もほぼ満席状態での移動となった[1]。

また、インド渡航には査証（ビザ）が必要だが、査証取得の代行を委託する旅行社を見つけるのにとても苦労した[2]。大手からアジアの特定地域に強い旅行社まで十数社に連絡したが、大手なら「海外渡航の需要の急拡大と人員不足のため、アメリカ、ハワイ、カナダのビザ発給は扱っているが、それ以外は休止している」との返事だし、アジア地域専門の小規模の会社も「基本的に今はビザ発給業務はしていない。数名分ならしてもよいが、料金はコロナ以前の 3 倍以上申し受ける」との回答だった。PAP（Protected Area Permit）[3] 申請に関しても知識と経験がある旅行社を見つけるのが難しく、結局、ビザも PAP 申請も、

---

[1] 名古屋発着インド行きの直行便がなかったため、名古屋－ベンガルール間のフライトはシンガポール航空（シンガポールにて乗り継ぎ：往路 15 時間〔うちトランジット 4 時間〕、復路 18 時間〔同 7 時間〕）を利用した。成田－ベンガルール間は JAL の直行便があった（片道 9 時間）が、料金はさらに 5 万円ほど高額だった。希望者がいれば、現地集合現地解散も可としたが、結果、全員が名古屋からのシンガポール航空を利用した。

[2] インドは、VOA（Visa on Arrival）や長期の観光ビザ（例えば 5 年の e-visa）が取得可能な国だが、PAP（Protected Area Permit）エリア入境者に対しては新規で半年しか観光ビザを発給しない（しかも e-visa ではなくパスポートに貼付するシール式のみ）。既に長期の e-visa を取得している人は、今回の PAP 申請によって取得済みの長期 e-visa は無効になることを了承する必要があった。加えて、今回は亡命チベット人居住地へ入境するため、ビザとは別に PAP が必要であった。このことも、旅行社はわれわれのビザ手配と PAP 申請代行を受け付けない理由とされた。

[3] PAP（Protected Area Permit）は、インド政府が定める保護区域に入境する外国人（インド国民でない者）がインド内務省に申請する。一般的には国境の問題や独立運動などが起きた係争地であるインド北東州が該当するが、チベット難民の居留地も PAP の対象である。

社会勉強の意味合いも兼ねて、申請画面を Zoom で共有しながら自力で申請した[4]。

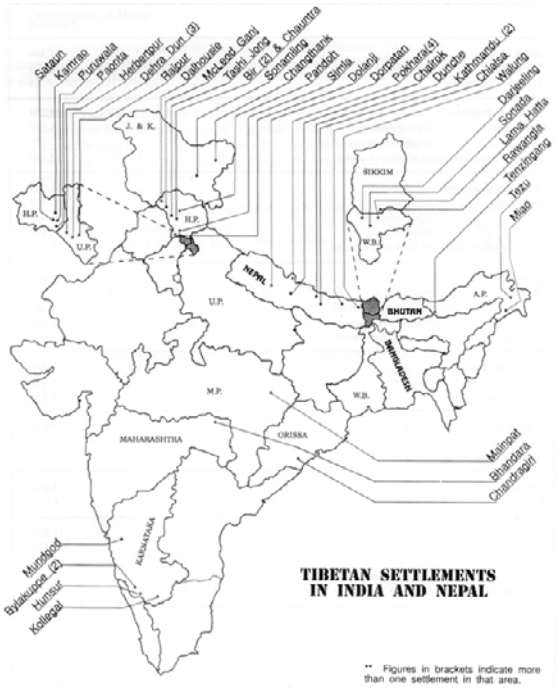
学生の募集に関しては、本件科目は学部と大学院の同時開講科目なので、告知対象者は 766 名（学部の 2 年生以上 670 名、大学院 96 名）だが、年度当初の 4 月に開催した説明会には 10 名ほどが参加し、その中から受講確定したのは 2 名であった[5]（いずれも人文社会学部国際文化学科 2 年生）。この 2 名は、海外旅行は初めて、人生で飛行機に乗るのも初めて、という勇敢ながらも初々しい面々だった。

受講者確定後は事前学習を実施し、海外研修（8 月 20 日～9 月 1 日）に臨んだ。フィールドワーク中、参加者 2 名は、多少お腹を壊す程度はあったものの、大病はせず、事故もなく無事研修を終えることができた。

以下、フィールドワーク実施場所の紹介をしておきたい。難民としてインドに居住するチベット人は当初の難民キャンプ（refugee camp）、現在は定住地（settlement）と呼ばれる場所に居住している。

【インドにおける亡命チベット人定住地】

1950 年代の「チベット動乱」を受け、1959 年にダライ・ラマ 14 世がインドに亡命し、その後を追って大量のチベット難民がインドに流入した。インドの中央政府は地方政府に諮ってチベット難民へ与える定住地の提供を求めた。比較的土地に余裕のある南インド各州が良い返事をし、1959 年末には、ネルー首相とカルナータカ州の協力で、南インドに最初のチベット人定住地が提供され、最初の 700 世帯弱のチベット難民が入植した［Avedon 1997: 87-88］。1960 年にはインドにチベット亡命政権（正式名称は「中央チベット行政府」：Central Tibetan Administration）が樹立され、難民の生活の安定のための定住地の建設（難民キャンプが定住地に発展）や難民子弟の教育機関が建てられていく。このような定住地は、1960 年代中ごろまでには 38 ヶ所（インド、ネパール、ブータン）になり、約 6 万人のチベット難民が各定住地に移動し、1980 年代初頭には 44 ヶ所、10 万人が生活する場所となった



[4] インドの査証、PAP 申請は、いずれもウェブ申請が基本である。査証は、ウェブ申請した画面からの印刷物と、パスポートや申請料金などを郵送で在日インド大使館/総領事館に送付する必要があるが、PAP に関してはウェブで申請し、承認が下りれば電子メールで許可証が発行される。

[5] 大学院生の応募はなかったので、「人間文化研究 H」は開講されないことが決定した。

［*ibid.*: 90］。その後定住地の統合が実施され、現在はインド 10 州 39 の定住地で暮らす。

【亡命チベット人定住地ムンゴッド】

インド共和国カルナータカ州ウッタル・カンナダ県ムンゴッドに立地する亡命チベット人の定住地はチベット語で Doeguling と呼ばれる。ムンゴッドは亡命初期の 1966 年に建設された定住地で、単独の定住地としてはインド最大規模である[6]。定住地は 10 のキャンプに区分され、それぞれのキャンプには選挙で選ばれたリーダーがおり、そのリーダーを中心に各キャンプ内の意思決定が行われる。各キャンプ間の距離は平均 4〜6 ㎞である。この定住地内に再建されたチベット仏教ゲルク派三大寺院のひとつがガデン寺である[7]。今回のフィールドワークではガンデン寺のジャンツェ僧院とシャルツェ僧院の他、尼僧院や教育機関（俗人の学校や僧侶の学校）、定住地事務所や高齢者施設、医療施設を訪問した。

【亡命チベット人定住地バイラクッペ】

バイラクッペの亡命チベット人居住地は 2 つの定住地から成る。Lugsum Samdupling（略称 Lug Sam）と Dickyi Larsoe（略称 Dilar）である。

ルグ･サム居住地は、インドで最初のチベット人居住区で、オールド・キャンプとして知られる。1960 年、インド政府の援助により、初期人口 3,000 人の入植地としてスタートした[8]。7 つの村やキャンプから成り、それぞれのキャンプに平均 30 家族が住んでいる。各集落間の距離は約 4〜6 キロである。

ディ・ラル居住地は 1969 年に設立され、当初の入植者数は 2,000 人であった[9]。ニュー・キャンプとも呼ばれる。インド NGO の MYARADA[10]（Mysore Resettlement and Development Agency）が、亡命初期の住宅の建設や基本的なインフラの整備に大いに貢献

---

[6] カルナータカ政府より 4,045 エーカーの土地を農業用地として貸与し、農業定住地として誕生した。当初の人口 4,302 人で、現在の定住地人口は 8,480 人。寺院に滞在する人口を加えると 16,000 人を超える（定住の 8,840 を含む）。

[7] チベット仏教ゲルク派三大寺院のうち、デプン寺もムンゴッドに再建された。

[8] カルナータカ政府より 3,210 エーカーの土地を農業用地として貸与し、農業定住地として誕生した。当初人口は 3,000 人、現在の定住地人口は 5,376 人である。

[9] カルナータカ政府より 2,000 エーカーの森林地帯が入植地と耕作地として提供された。当初人口は 2,000 人、現在の定住地人口は 2,483 人である。

[10] マイラダ（MYRADA: Mysore Resettlement and Development Agency）は、チベット難民の再定住を支援するために 1968 年に設立されたインドの NGO である。マイソール州（現在のカルナータカ州）を拠点とする。80 年代初頭にチベット・プログラムが終了するまで、チベット難民の再定住や生活再建のための開発事業に従事した。1987 年以降はチベット人の再定住事業から離れ、インド農村部の貧困層や社会から疎外された人々に焦点を当て活動している。MYRADA という頭字語は現在一般的に使われており、組織のロゴにもなっている。

した。近隣の都市であるマイソールへ 94 ㎞、マンガロールへ 170km、ベンガルールへ 250 ㎞に位置し、国道沿いにあることから観光地としても人気がある。

ルグ･サム居住地（オールド・キャンプ）とディ・ラル居住地（ニュー・キャンプ）を合わせると、6,000 エーカー／8,000 人の定住となり、インド最大の居住地である。ここでもキャンプ・リーダーを中心に各キャンプ内の意思決定が行われる。チベット仏教ゲルク派三大寺院のひとつのセラ寺はバイラクッペに再建された。今回のフィールドワークではセラ寺のセラ・メイ僧院の他、教育機関（俗人の学校や僧侶の学校）、定住地事務所や高齢者施設、農業試験場を訪問した。

【インド世界を知るための行程】

今回のフィールドワークの主眼は、上述のインドに居住する亡命チベット人居住地訪問での調査だったが、それに加えて、難民の受け入れ国インドの政策を知るための行程も入れ込んだ。場所はいずれもベンガルール市内である。

・在バンガロール日本総領事館への表敬訪問（在外公館の業務、日系企業のインド進出に関してブリーフィングを受ける）
・チベット亡命政府の定住地で開催されていた地方議会（Local Assembly）へのオブザーバー参加
・インドのカルナータカ州政府の州議会議事堂の見学と与党内院内幹事長（The Government of Chief Whip, Karnataka Legislative Council）との意見交換

【フィールドにおいて学ぶこと】

海外渡航が初めての学生には許容過剰の行程だったかもしれないが、圧倒的な言葉のシャワーと情報量とスピードで脳がフル回転し、全身全霊で「インド」「チベット」を学ぶことになったはずである。その圧倒的情報処理過程を、人によっては「脳をわしづかみにされた」と表現する人もいる。脳内に新しい経路が構築されたに違いない。

政府機関から NGO、教育機関、僧侶・尼僧養成機関、俗人のチベット人や亡命チベット社会を観光しに来ているインド人等々、専門用語や英語圏特有のアルファベットでの略称、当該コミュニティでは当然のように使用されていることば（例えば、チベット人はダライ・ラマを呼称する際に、「キャムグン・リンポチェ（Kyabgon Rinpoche「大救済尊」)」と呼んだりする）等、ありとあらゆる場面において「聞きなれない」「捉えられない」語彙が頻出する。こういった状況にもめげず、学生たちは状況を把握しようと、相手の話を聞こうと、とにかく真摯に耳を傾け、メモを取り、一生懸命質問した。

デジタルネイティブ世代の学生ではあるが、手書きのノートに諸々書き込み、色ペンを使ってハイライトし、次の質問につなげる姿が「フツウの光景」として観られたことは、フィールドワーク冥利に尽きると思う。学部生のそのような姿は、同年代のチベット人学生にも印象深かったようで、最後のお別れ会を兼ねた夕食の際、何人もの学生がそうした

日本人学生の真面目さ、勤勉さ、実直さを称賛してくれた。お互い、過ごした時間は数時間から数日ではあったが、異なる文化の同世代の人間と接し、それぞれ考えたことは多かったようだ。日本人、亡命チベット人、最後の夕食会は、涙と笑い溢れるふりかえりの場となった。

フィールドワークで情報を集め、人に問い、調査をするということ以外に、生身の人間として交流し、意見を交換したり、趣味の情報をやり取りし、その人の人生の軌跡にふれる時間を通して、自分の生まれた環境やこの先の生き方を考えることにもなったと思う。

【謝辞】

1.

本研修の実施に協力し、自らもフィールドワークに参加してくださった院生の淺井教祥さん（龍谷大学大学院文学研究科〔仏教学専攻〕博士後期課程）には、2022 年度のオンラインフィールドワークの時から特にお世話になった。彼のチベット仏教および仏教一般に関する学術的知見により、われわれの理解は幾度も深められた。記して感謝申し上げる。

2.

本研修の実施に際し、PAP 申請のインド側でのフォロー、亡命チベット人定住地内のあらゆるロジスティックスの調整、移動の手配等、研修の全行程にわたり協力をしてくださった CTA（中央チベット行政府：Central Tibetan Administration）内務省および関係定住地事務所の方々へ、ここに記して感謝申し上げる。また、ベンガルールの CRO（Chief Representative Office）に至っては、われわれの研修記事を迅速に作成し、CTA のウェブサイトに掲載いただいた。この場を借りてご厚情に感謝申し上げる。

［記事タイトルの日本語訳は榎木による］

1）「教育・文化交流の一環として日本の学生が南インドのチベット人居住地と僧院を訪問」
Students from Japan Visit Tibetan Settlement and Monasteries in South India as Part of Education and Cultural Exchange

https://tibet.net/students-from-japan-visit-tibetan-settlement-and-monasteries-in-south-india-as-part-of-education-and-cultural-exchange/?fbclid=IwAR3z0n30qGKSJUQ18K2BbMJvXniuGbS6nYuNYs8nSI58ZYcu6DHEGK_wYso

2）「日本からの学生が文化交流の一環として南インドのチベット人コミュニティを訪問」
Student Delegation from Japan Visits Tibetan Community in South India as Part of Cultural Exchange

https://tibet.net/student-delegation-from-japan-visits-tibetan-community-in-south-india-as-part-of-cultural-exchange/

2024 年 1 月 18 日

榎木美樹

参考文献

Avedon., J.F. [1997 (first published in 1979)], *In Exile From The Land of Snows: The Dalai Lama and Tibet Since The Chinese Conquest*, Rekha Printers Pvt. Ltd., New Delhi（邦著：ジョン F.アベドン著、三浦順子・小林秀英・梅野泉訳［1991］『雪の国からの亡命 ―チベットとダライ・ラマ 半世紀の証言』地湧社）.

参考 URL

Department of Home, CTA(Central Tibetan Relief Committee)ウェブサイト「Tibetan Settlement in India」
https://centraltibetanreliefcommittee.net/settlements/tibetan-settlements-in-india/

MYRADA ホームページ
https://myrada.org/

授業風景

２．自己紹介

名前　学科学年
①　趣味
②　行きたい国
③　好きな著名人
④　マイルール
⑤　人生のテーマ

豊田朱理　国際文化学科２年

①　読書、メイクとヘアアレンジ、料理、おしゃべり、一人で考え事をすること

②　フランス、エジプト、いつか月に行ってみたい

③　山田涼介、西畑大吾、あいみょん、ミセス、sumika

④　ほぼ毎晩日記を書く。チャレンジしてから考える。

⑤ 今を生きる、楽しむ

水間玲衣　国際文化学科２年

①　ダンス

②　ベトナム

③　ジョングク

④　試験や旅行の前はカフェラテを飲まない

⑤　なるようになる

浅井教祥 龍谷大学大学院 文学研究科

①　楽器（オーボエ）

②　エクアドル、カナダ

③　久石譲、小田和正、兵動大樹

④　たくさん食べていっぱい寝る

⑤　生死事大 無常迅速

榎木美樹　名古屋市立大学 人間文化研究科/人文社会学部国際文化学科 准教授

①　移動すること。映画・ドラマ。温泉。

②　北欧、東欧

③　聖徳太子、親鸞、宮沢賢治、石牟礼道子（いずれも生きていたら会ってみたい）

④　一日“三”善

⑤　艱難汝を玉にす。明けない夜はない。信じる/楽しむ/諦めない。
おもしろきこともなき世をおもしろく。

３．授業スケジュール

No.	Date	Contents
1	4/14	海外フィールドワーク A（インド）について：目的/概要/授業内容/注意点
2	4/21	研修の目的と訪問地の概況、PAP 申請レクチャー
3	5/19	参加意向最終確認、チケット購入の確認、PAP 申請準備
4	6/2	PAP 申請：実際にオンライン上で実施　https://papvt.mha.gov.in/
5	6/9	チベットの基礎：チベットの文化と歴史、インドの亡命チベット社会
6	6/16	旅行社（大陸旅遊）による説明：インド渡航の注意点、空港での過ごし方
7	6/23	【輪読】言語 ● 榎木園鉄也 2006「インドの英語」（河原俊昭・川畑松晴 2006『アジア・オセアニアの英語』）pp.79-100
8	6/30	【輪読】チベット問題：ガバナンスとメディア ● 田島英一「後発国民国家のナショナリズムとガバナンス：中国『チベット問題』を事例に」（梅垣理郎編 2003『総合政策学の最先端 III：多様化・競争・統合』慶応義塾大学出版会）pp.26-53。 ● ルノワール.,F.「ダライ・ラマと仏教のメディア化」（2010『仏教と西洋の出会い』（株）トランスビュー）pp.295-303
9	7/7	【輪読】チベットの文化と歴史 ● 平野聡「チベット社会：歴史と<現代化>」（佐々木信彰編 2001『現代中国の民族と経済』世界思想社）pp.159-184。
10	7/14	【輪読】今日のチベット社会 ● Tsering Paljor, 2007, 'Current Situation of Tibetan Refugees in Exile' ● 山田孝子 2010「移動が生み出す地域主義：今日のチベット社会にみるミクロリージョナリズムと汎チベット主義」（地域研究コンソーシアム『地域研究』10（1））pp.33-51
11	7/21	【輪読】難民の法的地位 ● 大西広 2012「『チベット難民』と現地の相克：ネパール・インドからの報告」(大西広編著 2012『中国の少数民族問題と経済格差』京都大学学術出版会)、pp.262-274（補論 2） ● 三谷純子 2016「インドのアイデンティティ・サーティフィケート（IC）」（陳天璽ほか 2016『パスポート学』北海道大学出版会）、pp.85-91（第 1 章 1.5.7） ● 三谷純子 2017「無国籍と国籍のはざまで」（駒井洋監修 2017『難民問題と人権理念の危機』明石書店）、pp.247-251（第 III 部 Column5）
12	7/28	【輪読】亡命社会の民主主義 ● 片雪蘭 2017「チベット難民における民主主義のジレンマ：2015-6 年度チベット亡命政府総選挙を事例に」（大阪大学ナレッジアーカイブ『未来共生学』4）、pp.403-417
13	8/4	【輪読】フィールドワーク ● 「地域調査法」（村山祐司編著 2006=2003『シリーズ<人文地理学>2　地域研究』朝倉書店）pp.53-79 ● 「フィールドワーク」（宮内泰介 2004『自分で調べる技術』岩波書店）pp.94-133 【出発前に】現地訪問に際しての準備および実施にあたっての注意点
	8/20～9/1 フィールドワーク	
14	9/15	フィールドワークふりかえり、レポート作成に向けて
15	9 月末	報告書編集：校閲 1 回目
10-12 月		報告書編集：校閲 2 回目、3 回目
1 月		報告書印刷

４．研修報告

インドにおけるチベット定住地でのフィールドワーク報告

人文社会学部　国際文化学科２年　豊田朱理

1.はじめに

本レポートは、2023 年８月 20 日～9 月１日にかけて行われたインドにおけるチベット定住地でのフィールドワーク報告書である。1959 年の中国チベット侵攻後、ダライ・ラマ 14 世は中国の弾圧から逃れるためにインドに亡命した。その後約 50 年にわたって多くのチベット人がインドへ逃れてきた。インドは 39 のチベット定住地があり、10 万人が暮らしている。世界の亡命チベット人 12 万人のうちのこの人数がインドで暮らしており、インドは亡命チベット人の最大の受け入れ国だ。インドにおけるチベット定住地では、かつてチベットにあって破壊された僧院や今もある僧院が再建されている。チベット語やダンスに楽器、食や民族衣装なども受け継がれている。チベットの地であったものを定住地でも残していく強さに私は圧倒された。弾圧から逃れ違う地に来てここまで力強く生き残るチベット文化とは何なのか、何がここまでチベットの文化を生き残らせているのか。そこで、チベットとインドにおけるチベット定住地のこれからを作っていく 10 代～20 代の生活実態に焦点を当てて、本レポートを進めていく。

2.インドの亡命チベット社会における学校教育

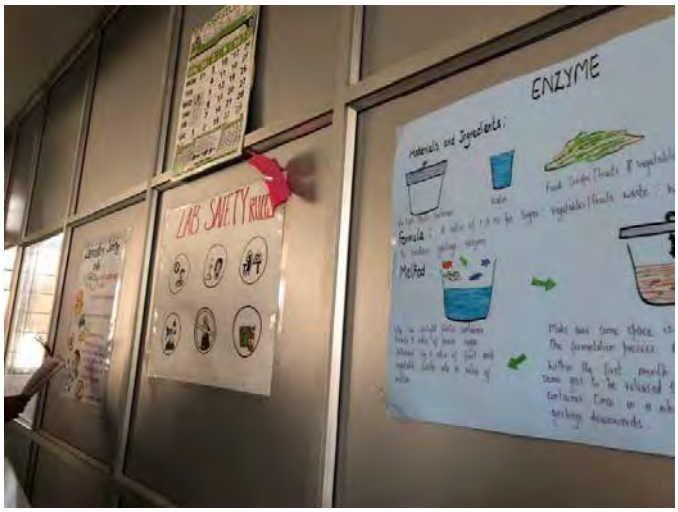
亡命チベット政権（CTA: Center Tibetan Administration）文部省は、インド、ネパール、ブータンに 84 か所の学校を管理している[11]。そのうち 30 校は、インド政府の中央チベットスクール管理局 the Central Tibetan School Administration（CTSA）の管轄下にある。ダラムサラにはチベット子ども村が、ムスリーにはチベット・ホーム・ファンデーションがあり、文部省の指導の下で自主運営を行っている。チベットには兄弟のひとりは僧にさせる習慣があり、僧院は教育の場であり才能如何で社会的地位を得るための方法でもあるとされている[12]。そのため、亡命チベット社会では僧院にも多くの子どもたちがいる。今回訪れたムンゴットとバイラクッペにある学校・僧院教育についてみてきたものをまとめていく。

Sambhota Tibetan Senior School　ムンゴット

ムンゴットにあるサンボタ・チベット・シニアスクールは６年生から 12 年生がいる、高

[11] ダライ・ラマ法王事務所ホームページ「主要な省」
[12] ダライ・ラマ法王事務所ホームページ「チベット僧院の教育」

等学校だ。亡命チベット政府の文部省の管轄下にある学校で、237 人の生徒、41 人の職員がいる。芸術、商業、インターネット、科学の 4 つのコースがある。朝の集会のようなものでチベットの歌とインドの歌を歌っていた。その演奏では、チベットの楽器が使われている。インドベースの亡命チベット人が設立した NGO である RDTS（Reimaging Doeguling Tibetan Settlement）の支援を受けて運営している。資金の多くは海外からで、話を聞いた範囲では海外の中でもアメリカからの資金が多く来ているということだった。



The Dalai Lama Institute for higher education（TDLHE）バンガロール

亡命チベット社会で生きる高校生で高等教育へ進学するものの多くは、インドの大学に通っており、チベットの教育を中心にした高等教育施設は十分ではない。そこで、チベット人がチベット文化に根付いた教育を受けられるようにすることと、さらなるチベット人とチベット文化の将来にわたる繁栄を目的として TDLHE が設立された。TDLHE の一つの特徴は、僧院教育を受けた者用の入学試験がありその試験に合格すれば入学できるところだ。私が見た範囲では、僧院教育を受けた者用の入学試験を設けているインドの大学はなかったため、よりチベット人が高等教育にアクセスしやすい施設であると考えられよう。

次に、教育プログラムを見ていく。この施設では、若いチベット人学習者を国際的な教育基準と同等の水準に到達させることを目標としており、学生は博士号を取得する機会が設けられている。2023 年現在、7 名の博士号取得者を排出し、追加で 8 人が博士号を取得する予定だ。UNHCR（難民国連高等弁務官事務所）の 2023 年難民教育報告書[13]によると、難民の高等教育の進学率はわずか 6 %である。日本の高等学校等進学率[14]が 83.8%であることと比較しても、とても低い。この統計に難民である亡命チベット人は含まれていない

[13] 2023-UNHCR-EDU_Report-screen[78].pdf
[14] 令和 3 年度学校基本調査（確定値）報道発表資料（mext.go.jp）
高等学校等とは、大学・短期大学、高等専門学校 4 年在学者及び専門学校入学者のことを指す。

が、国際的にそのほかの難民への教育の機会が少ないことを踏まえると、難民である当事者が教育施設を管理運営して彼らへ教育の機会が作られていくことは、これからの亡命チベット社会とチベット繁栄・持続性を高めることだろう。

Sambhota Tibetan CVP School バイラクッペ

この学校では、私一人に対して高校生 8 人が学校を案内してくれた。その中で学生から聞いた話をまとめていく。チベットにはアムド、カム、ウ・ツァンの三つの地域がある。その三つの地域ごとに伝統衣装があり、この学校にはそのすべてがそろっている。毎週水曜日には、自分の好きな地域の衣装を着てダンスを踊っている。この学校は衣装の品ぞろえがいいため、ほかの学校に貸し出すこともある。

ここからは私の考察をまとめる。ここの学校だけでなく、今回訪問したほとんどの学校に伝統楽器が置いてあり、その楽器を生徒が弾くことができる。そのためチベット定住地の学校では、生徒がチベットの音楽と深くかかわっていることが分かった。写真一枚目の楽器は、Dranyen、二枚目の楽器は Yangchen、という名前のチベットの楽器である。

Gaden Shartse Thoesam Norling Monastic School ムンゴット

ここでは、約 1200 人の若者が僧になるために勉強をしている。1 年生から 11 年生までの学年があるが、学ぶ内容によって分かれるため年とずれた学年で勉強していることもあ

る。毎朝お経を暗記する時間がある。チベット仏教の勉強だけでなく、コンピューターや英語、数学に科学の授業もある。先生である僧侶の話によれば、この学校ではチベット仏教僧は増えているが、チベット人の僧は激減しているのだという。モンゴルやインド、ネパールの僧が多い、という話だった。食事に関しては、二日ずつ交代の 25 人で 1200 人分のご飯を作っている。

3.チベット人の若者との交流

チベット・亡命チベット社会を見ていくうえで若者に注目したことの一つとして、今回のフィールドワークで同行してくださったチベット人 A さんとの交流についてまとめていく。彼は現在 27 歳で、亡命政府 CTA で働いている。6 歳の時にチベットから約 1 か月半かけてインドに亡命してきた。両親と祖母はチベットにいて、スマートフォンで電話をしたり写真を送りあったりしているが、21 年間会っていない。家も仕事も、生活の基盤はインドにある。同行してくれた A さんに限らず、老人ホームの職員、ガソリンスタンドの職員など、様々な若者にあったが、CTA 管轄下にある施設で CTA 職員に話を聞くことが多かった。亡命チベット社会で生きる若者にとって CTA 職員とは安定した収入を得られる、人気のある仕事の一つであることが分かった。

4.まとめ

亡命チベット社会の学校では、小学 1 年生から 4 年生まではすべてチベット語で教育がされており、生徒はチベットのダンス・音楽にも常に触れている。この、学校という環境の整備、子どもたちへの教育はチベット社会が根強く生き残っていることの一つの要因だと私は考える。

英語教育とチベットのアイデンティティ

人文社会学部　国際文化学科　２年　水間玲衣

１．はじめに

世界にはおよそ 12 万人のチベット難民がおり、そのうちのおよそ 10 万人がインドに滞在している。インドは最大のチベット人受け入れ国なのである。教育に重きを置くダライ・ラマの要望から、亡命初期からチベット人の子供たちのための学校が設立され、教育体制が整えられてきた。今回、南インドのチベット人定住地を訪れ、複数のチベット人学校を訪問し、教育の実態についてフィールドワークを行った。各学校で、子供たちのアイデンティティを守るための文化継承教育が盛んにおこなわれていた一方で、英語教育も徹底して行われていた。はじめに、チベットでの教育事情を説明し、なぜ子供たちが教育のために危険を冒して亡命するのかを述べる。次にインドにおけるチベット人学校の概要に触れたうえで、私が実際に目にした学校の様子を文化継承教育と英語教育の両面から説明し、子供たちのアイデンティティと教育の関係について考察する。

２．チベットにおける教育

なぜ、多くの子供たちが教育のために命を懸けてヒマラヤを超え、インドの地へとやってくるのだろうか。その背景には、チベットの言語や歴史、アイデンティティを否定する、中国政府に支配された教育の実態がある。こうした背景を、”Education of Tibetan refugees” という記事[15]を参考により詳しく述べていきたい。

1980 年代から、7000 人以上の子供たちがまっとうな教育のためにヒマラヤを超えた。チベットの学校では、中国政府によってチベット語ミディアムの教育が禁止されおり、中国の歴史、政治、文化を中心としたカリキュラムが適用されている。チベットの歴史は、「野蛮で遅れている、異常なチベットを中国が解放した」という趣旨で語られる。1990 年代後半からは、中国政府はチベットの文化、伝統、習慣、そしてダライ・ラマを批判することを教育目標として掲げている。そもそも学費が高いので学校にいけない子供たちもおり、行けたとしても最低限の設備しか整えられていない上に、チベットのアイデンティティを否定されるという過酷な日々が待っているだけなのだ。しかし、こうした中国式の教育を受けなければ、大学に進学することも安定した職に就くこともできないのである。中国語を押し付けられ、「チベットは中国の一部だ」と教えられる、こうした教育の中で、子供がチベットのアイデンティティを失うことを恐れた親が、まっとうな教育のために子供をチベットの外へと亡命させるのだ。

---

[15] Mallica Mishra, 2022, “Education of Tibetan refugees from: The Routledge Handbook of Refugees in India”, Routledge.

３．インドのチベット人学校

〇概要

1959 年、中国軍の侵攻によりおよそ 85000 人ものチベット人がインドへ亡命した。初のチベット人学校は翌年の 1960 年、ムスリーに設立され、現在ではその数はインド、ネパール、ブータン、を合わせて 87 に上り、およそ 28000 人の子供たちが教育を受けている[16]。インド国内のチベット人学校を運営している団体は、インド政府人的資源開発省内に設置された中央チベット学校管理局（CTSA: Central Tibetan Schools Administration）や、チベット子ども村（TCV: Tibetan Children's Village)、サンボタ・チベット学校組織（STSS: Sambhota Tibetan Schools Society）などである。学年制度はインド式であり、前期初等教育 5 年と後期初等教育 3 年を合わせた義務教育が 8 年、前期中等教育が 2 年、後期中等教育が 2 年、その後に高等教育と続く[17]。チベット人学校が設立され始めた当時は、英語が教授言語であったが、チベット文化継承への危機感から、チベット亡命政権は過去 2 回教育方針の見直しを図った。1984 年に制定された'Tibetanization of Education'という教育方針では、第 5 学年までの教育はチベット語ミディアムとし、第 6 学年から第 12 学年までの教育ではチベット語を第 2 言語とすることが定められた。さらに、2004 年には'Basic Education Policy for Tibetans in Exile'という新たな方針が示され、すべての学年においてチベット語ミディアムの教育とし、第 4 学年以降の教育では英語を第 2 言語とすることが定められた。子供たちが将来、インド社会で進学、就職して安定した生活を送ることができるよう、徹底した英語教育が必要である一方、チベットの言語やアイデンティティも守られなければならない。こうした、英語教育とチベットの伝統教育のバランスをいかにとるかというジレンマの中で教育方針が試行錯誤されてきたのである。

〇私が見たチベット人学校

〈訪問先〉

今回訪問した学校はムンゴットの Sambhota Tibetan School の 3 校(それぞれ小学校、中学校、高校)、そしてバイラクッペの Sambhota Tibetan School(高校)、Sambhota Tibetan CVP School (小中高一貫校)と SOS Tibetan School(小中高一貫校)、計 6 校である。

---

[16] ダライ・ラマ法王日本代表部事務所ホームページ「チベットの教育」
https://www.tibethouse.jp/%E3%83%81%E3%83%99%E3%83%83%E3%83%88%E4%BA%A1%E5%91%BD%E6%94%BF%E6%A8%A9%E3%81%AB%E3%81%A8%E3%81%A3%E3%81%A6%E6%9C%80%E5%84%AA%E5%85%88%E8%AA%B2%E9%A1%8C%E3%81%A7%E3%81%82%E3%82%8B%E6%95%99%E8%82%B2/

[17] 森五郎・澤村信英、2017 年、「インド北部ラダック地方のチベット難民学校 ―その特徴と役割―」、広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第 20 巻第 1 号、17～29 頁。
https://cice.hiroshima-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/01/20-1-2.pdf

〈チベット文化継承教育〉

チベット文化継承のための取り組みを、まずはバイラクッペの Sambhota Tibetan CVP School を例に紹介する。学校での一日はお祈りから始まる。子供たちは一人一冊チベット仏教のお経の冊子を持っているのだ。同校には尼である教師が一人おり、チベット仏教の学びを深める機会も与えられている。第 10 学年の時間割表には、毎日 5 時間目の枠に「TIB」と書かれている。生徒たちの説明によると、この科目の勉強内容は、第 3 学年まではチベット語の読み書きが中心であり、第 4 学年からはチベットの文化や歴史が中心になるという。音楽室ではチベットの伝統楽器（ピワンという三味線のような楽器）が壁に立てかけられており、箪笥にはチベットの伝統衣装が収納されていた。毎週水曜日(ダライ・ラマが生まれた曜日であり、チベット人にとって特別な日である)はその伝統衣装を着てチベットのダンスを踊るそうだ。生徒たちは楽器を演奏するときも衣装の着付けをしてくれた時もとても慣れた手つきで、チベットの伝統が彼らのような若い世代にも受け継がれているのだと感じた。

ムンゴットの Sambhota Primary School でも、数十人の子供たちが伝統楽器の演奏を聴かせてくれた。日本の小学生がリコーダーを決まって習うのと同じように、彼らはチベットの伝統的な楽器を習っているのだ。

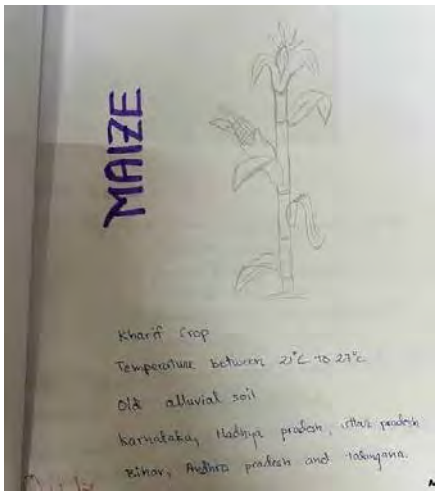
また、バイラクッペの SOS Tibetan School においては、低学年の校舎にチベット語ルームという教室があり、チベットの伝統衣装を着た人のイラストや、食べ物や動物などのチベット語の表などが壁一面に貼られていた。こうした空間があることで子供たちはよりチベットの文化や言語を吸収できる。さらに、同校は Tibet Our Country Project という、チベット文化継承のためのイベントを毎年行っている。クラスごとにチベットに関するトピック（衣装や食べ物、ダンス、社会問題など）を一つ選び、それぞれが出し物をするという行事で、親や地域の人々にも開かれている。授業にとどまらず、大きなイベントを通じても文化継承が取り組まれているのだ。

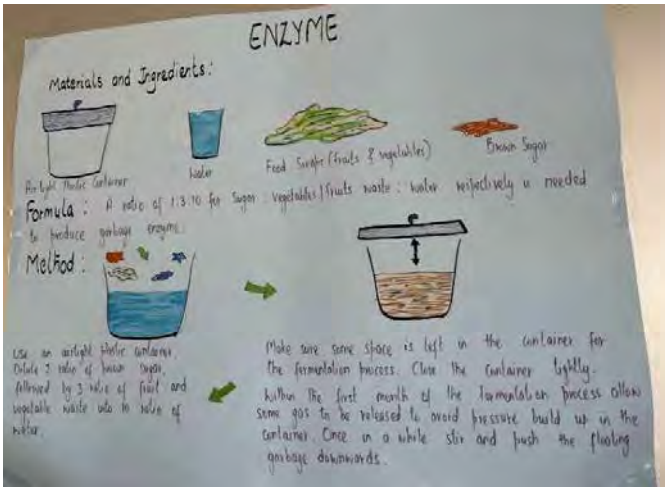
SOS Tibetan School のチベット語ルーム(左)

Sambhota Tibetan Senior School(ムンゴット)の音楽室に並ぶ伝統楽器ピワン(右)

〈英語教育〉

訪問した先々で驚いたのは、廊下や教室に並ぶ掲示物のほとんどが英語で書かれていたことだ。行事や注意書きをはじめ、各教科の学習内容に関するポスターもほぼすべて英語で書かれていた。Sambhota Tibetan CVP School では、生徒が植物の観察記録をみせてくれたが、それも英語で記録されていた。実際に授業風景を見る時間はあまりなかったので、各教科の授業で英語がどのように取り入れられているのかはわからなかったが、掲示物や生徒の製作物を見る限りでは、たとえ教授言語がチベット語であっても、生徒が授業内容を英語で理解し、英語で説明できるように教育の在り方が工夫されているのだとわかった。

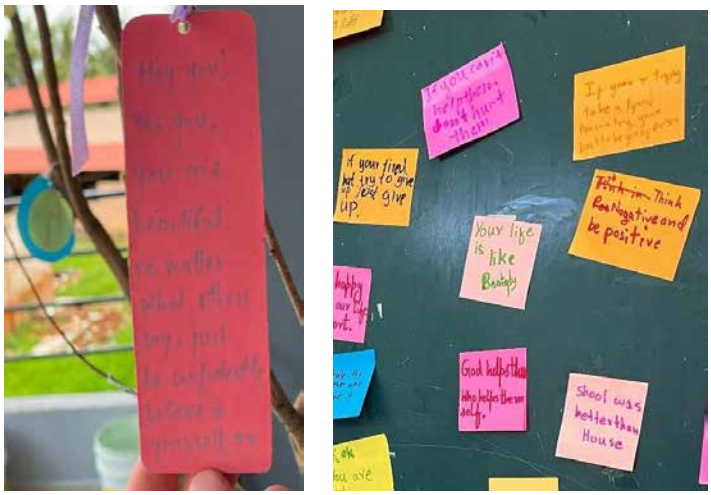




Sambhota Tibetan CVP School の生徒が作成した植物の観察記録(左)

Sambhota Tibetan Senior School(ムンゴット)の実験室のポスター(右)

さらに、授業に関するものに限らず、カウンセラールームの黒板に寄せられたメッセージや、短冊に書かれた文章、掲示物に書かれた落書きまでもがほとんど英語であった。英語を書かされているというよりも、勉強の枠を超えて、英語で書くことが子供たちの中で習慣化しているようであった。また、Sambhota Tibetan CVP School では第 10 学年の生徒と交流することができたが、彼らの英語はとても流ちょうであった。各教科において、チベット語に限らず英語でも理解を深めることによって英語を強化し、英語で自らの考えや思いを不自由なく表現できるようになるのだろう。



Sambhota Tibetan Senior School(ムンゴット)の生徒のメッセージ

〈考察〉

以上のように、インドのチベット人学校では文化継承のための教育と英語教育という二つの体制が整えられている。設立当初と比べて、チベット語やチベットの文化、歴史をより強調するように教育方針が変化してきたという点からも、昨今のチベット人学校の教育は、アイデンティティが否定される苦境から逃れてきたチベット人にとって大きな希望であるといえるだろう。しかし、実際に子供たちの流ちょうな英語を聞き、英語で囲まれた教室風景などを目の当たりにすることで、「徹底的な英語教育は子供たちがチベット語を軽視することにつながり、やがて彼らの帰属意識まで弱めてしまうのではないか」と思い至った。

このように考えていた私に新たな知見を与えてくれたのは、Sambhota Tibetan CVP School の第 10 学年のある女子生徒である。彼女は、同校においてインド人の先生が多かった数年前と比べ、チベット人の先生が増えたことで教育体制が格段に良くなったと話した。その中で彼女は、先生と生徒が同じチベットの血を引いていることを “same blood”という言葉を繰り返し用いて強調していた。これは、チベット人としてのアイデンティティに誇りを持ち、アイデンティティを強く保持しているということが伝わる言葉であった[18]。一方で、図書館で英語の本とチベット語の本ではどちらを多く読むかという話題になったとき、彼女は、チベット語の本は借りず英語の本ばかり読んでいる、と答えた。理由として、チベット語が亡命社会の外では通用しないということを挙げていた。彼女との会話を通して、英語を重視しているからと言って、必ずしもチベットのアイデンティティが薄れるわけではないのだと気づいた。将来のために英語を重視しながらも、チベットへの帰属意識を強く保持する若者もいるのだ。

---

[18] 彼女の言葉は、解釈の仕方次第で排他的なナショナリズムと捉えることもできるだろう。しかし、彼女の言葉を引用した目的は、あくまで「英語を重視しながらもチベットのアイデンティティを強く保持している若者がいる」ということを示すためであるので、上記のような問題に関しては本稿では触れない。

英語習得とアイデンティティの保持の両立を可能にしているのは、一つは彼らが生活するコミュニティーであり、もう一つは初めに述べたような学校での文化継承教育であろう。インドの地であっても、亡命社会において子供たちは多くのチベット人に囲まれ、チベット語で会話をし、チベットの生活様式に沿って暮らしている。そして学校では、伝統的な衣装やダンス、行事に親しみ、チベットの歴史や信仰を学ぶのだ。このような環境で育まれた子供たちのアイデンティティが、英語教育によって簡単に飲み込まれてしまうということは、現段階では考えにくいのではないか。

４．今後

以上のように、英語教育によってチベットのアイデンティティが損なわれる危険性は、現状を観察する限り、それほど高くないという結論に至った。しかし、亡命社会の在り方が変化すれば、教育の在り方も変化する可能性がある。インドのチベット人亡命社会は、現在その構成員が大きく変化しているのだ。2008 年のラサ騒乱(中国チベット自治区ラサ市を発端に独立を求めるデモをきっかけとして発生した一連の暴動)以降、インドへの新規亡命者の数が激減した。こうした背景から、インドで生まれた難民 2 世、3 世の子供たちが増えている一方で、チベット生まれの人口は減少傾向にある。また、ホワイトカラーの職業を求めてインド社会や欧米社会に進学するチベットの若者も増加している。亡命社会での主な働き先は農業や衣料販売といったブルーカラーの職業に限られるからだ。さらに、現在ではチベット人のコミュニティーに、様々な国や地域のルーツを持つ人々が増加している。僧院においても、ネパールやラダックのような、チベット以外の地域出身者も住職に就くようになり、欧米をはじめ様々な地域の子供たちがチベット仏教僧になるべく、チベット人社会へ進出するようになった。このように様々な文化や言語が亡命社会に流入していく中で、英語はコミュニケーション手段としてますます重要視されるようになるだろう。社会の変化とともに学校教育もまた見直される日が来るかもしれない。現段階においては、英語の学習とアイデンティティの保持とが絶妙なバランスを保っているようにみえたが、今後はそのバランスが崩れることが危惧される。社会の変化が学校教育にどのような影響をもたらし、子供たちのアイデンティティにどのようにはたらきかけるのか、という問題は今後一層重要な論点となるだろう。

５．おわりに

チベットの教育現場では、中国政府によりチベット語が禁止されており、チベットのアイデンティティや文化、歴史も否定されている。人々はチベットのアイデンティティを守っていくため、子供たちを新たな地での教育に託すのだ。インドにおいて、亡命政府は文化継承教育ができる体制を作り、過去 2 回の改革を経てよりチベットのアイデンティティを強調する方針を固めてきた。抑圧されてきたチベットの人々にとって、このような新たな地での教育は大きな希望であろう。今回の学校訪問で、チベットの言語や歴史、仏教に

ついて学びを深め、音楽や衣装、ダンスに親しむ子供たちの様子を実際に見ることで、文化継承教育の取り組みがいかにアイデンティティの保持に寄与しているかを実感した。一方で、英語を使った学びも重視されており、子供たちに英語がかなり浸透していることも分かった。英語教育によってチベット語が軽視され、アイデンティティが弱まるという可能性についても一時は考えたが、英語習得とアイデンティティの保持は必ずしも対立しないのだという考えに至った。ただし、このようなバランスが保たれている要因は、現在の亡命社会でのチベット文化の存在の大きさと、その中で行われる文化継承教育との相乗効果であろう。今後、チベットに足を踏み入れたことのない、亡命 2 世、3 世の人々や、進学や就職のために亡命社会を出ていく若者は増加すると考えられる。そして、様々なルーツを持つ人々が集まり、多種多様な文化、言語が流入するだろう。このような風潮の中で、英語の重要性は一層高まり、教育の在り方が変わることも予想される。亡命社会の変化が教育方針にどのような影響を与え、それにより子どもたちのアイデンティティがどのように変化していくのかを今後注視していきたい。

インドフィールドワーク報告

龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程 2 年 淺井 教祥

はじめに

筆者は、2023 年 8 月 20 日から 9 月 1 日にかけて、名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科のフィールドワークに同行し、南インドの亡命チベット人定住地の見学・調査する機会を得た。現在、チベット仏教の思想、特にツォンカパ（Tsong kha pa blo grags pa, 1357-1419）を中心としたゲルク派の教学を学ぶ筆者は、インドにおけるチベット僧院の現在のすがたの経験、チベット語文献の収集、目先にあったチベット仏教教義に関する問いを尋ねることを主たる目的として、調査に同行した。

本レポートでは、以上の調査報告として、インドにおける現在のチベット仏教寺院について、およびインド大乗仏教を代表する学派である唯識派が主張する三性説とその譬喩について、本調査で入手した資料の部分試訳を提示する[19]。

インドで再建されたチベット仏教寺院

チベット仏教において、一般的に「寺院」と呼ばれる施設には大きく二つに分類される。一つは「ラカン（lag khang）」と呼ばれる、信仰の拠り所としての施設であり、ラサのチョカン（jo khang, 大昭寺）などがその代表的な施設である（図 1）。もう一つは、「ゴンパ（dgon pa）」と呼ばれる、出家修行者たちが戒律に従って生活ための施設であり（図 2）、本調査で訪問したのは、このインドで再建されたゴンパである（図 3）。

今回の調査では、ゲルク派のガンデン寺ジャンツェ学堂・シャルツェ学堂、デプン寺ゴマン学堂、セラ寺ジェ学堂、タシルンポ寺、サキャ派のサキャ寺、ニンマ派のナムドルリン寺に訪問した[20]。ニンマ派の寺院を除く寺院は、いずれもインドで再建された寺院で、元の同名の寺院は、現在のチベット自治区に今も存続している。

---

[19] 当該箇所について、セラ・メ学堂の僧院長であるゲシェ・タシ・ツェリン師（Tashi tsering, 1958-）のご教示を受けた。その内容と本レポートで訳出した箇所の解説については、淺井教祥「ツォンカパの『大乗荘厳経論』における幻喩の解釈」『印度学仏教学研究』72(2) に掲載予定。

[20] このほかに、ムンゴッドで設立されたチャンチュプ・チュリン尼僧院にも訪問した。女性の出家については、チベット仏教を含む各地の仏教教団が抱える問題の一つとして注目されており、この問題について、2007 年にハンブルクで出家者と研究者による国際会議が開かれている。その様子は伊藤[2008]によって報告されており、また同会議の成果報告として Thea, Jampa[2014]が刊行されている。

（図 1）チョカン（中国・ラサ市、2016 年 8 月筆者撮影）

（図 2）ラプラン寺（中国・甘粛省, 2018 年 2 月筆者撮影）

（図 3）セラ寺メ学堂（インド・バイラクッペ, 2023 年 8 月筆者撮影）

今回訪問したゲルク派のゴンパについて、ゴンパは下部組織である複数の学堂（grwa tshang）によって構成されている。学堂には、多くの出家僧が所属し、集団で共同生活を送りながら学問を修める場として運営されているが、その学堂の複合体としてそれぞれ一つのゴンパとして成り立っている。例として、ガンデン寺には、ジャンツェ学堂とシャルツェ学堂の二つの学堂があり、いずれも形式上はガンデン寺であるが、実質的にはそれぞれが独立した組織として運営される。インドで再建されたガンデン寺の学堂についても同様であり、隣接した敷地内に設置されているものの、「ガンデン・ジャンツェ僧院」や「ガンデン・シャルツェ僧院」といった寺院の呼称や組織形態から、さらにその独立性が強調されている[21]。また、修行僧の学習内容についても、所属する学堂によって各学級の所要期間や教科書などの詳細が異なっており、各々の学堂の伝統に則って行われている[22]。

今日のインドにおける学堂では、様々な社会状況や環境の変化を受け、国語（チベット語の読み書き）や歴史、英語、数学といった若年僧侶のための現代教育の場や（図 4）[23]、高度な理工学を学ぶ研究所（図 5）といった施設がそれぞれの学堂で設けられており、仏教を学び実践するだけではなく、僧侶にとっての小学校から大学にいたるまでのような教育機関としての側面を持つようになっている。

---

[21] チベット仏教における学堂については、小野田[1989]、西沢[2011: 710-711]を参照。
[22] 西沢[2011], ツルティム[2011], 高松[2014]などを参照。西沢[2011]では、著者の長年のフィールドワークによって、当時のゲルク派僧院における履修課程の詳細が報告されている。
[23] チベット中央政権文部省[2012]

左（図 4）チベット文字の筆記法とその発音を学ぶガンデン寺シャルツェ学堂の少年僧（インド・ムンゴッド、2023 年 8 月筆者撮影）
右（図 5）The Drepung Losel Ling Meditation and Science Center（インド・ムンゴッド, 2023 年 8 月筆者撮影）

三性説と幻の譬喩

インド仏教では、釈尊の教えや戒律の解釈をめぐり、僧伽が様々な部派や学派に分裂することになるが、仏教の根本思想である縁起や無我の解釈についても大きな意見の対立がある。具体的に、私たちがあらゆる存在しているもの、あるいは存在していると思っているものに対して、それはどのような在り方であるのか、なぜそれが存在していると認識するのかなどという、ものの真実の在り方の探求方法についてである。

このような、ものの存在や認識に関するインド仏教における諸見解について、チベット仏教では、インド仏教における代表的な学派として、大乗仏教成立以前の説一切有部と経量部、そして大乗仏教の二大学派である中観派と唯識派の四大学派を挙げる[24]。このうち、大乗仏教を代表する二大学派である中観・唯識学派は、龍樹が打ち出した空思想を中心とする思想体系を展開するが、唯識派ではさらに、あらゆる諸存在は、構想された在り方（遍計所執性）、他に依存して起こっている在り方（依他起性）、真実なる在り方（円成実性）の三つの固有の性質いずれかを有するものであるとする三性説を主張し、中観派に対立する学派としての思想体系を築いている。

チベット仏教において、この中観・唯識両学派の空思想に対する理解を提示するものとして、ゲルク派の開祖であるツォンカパの主著の一つに『了義未了義善説心髄』（*Drang nges legs bshad snying po*: 『善説心髄』）がある。ツォンカパは、中観帰謬論証学派の空思想に立脚した思想家として、チベット仏教教学の確立における重要な人物の一人であるが、この『善説心髄』では、両学派における空思想の解釈方法について分析がまとめられている。特に、上記の三性説の解釈をめぐる議論について詳細な解説を与えており、ゲルク派において唯識思想を理解するための重要なテキストとされている[25]。

---

[24] チベット仏教におけるインド仏教四大学派の理解についての概要は、チベット中央政権文部省[2012: 292-310]などを参照。
[25] この『善説心髄』は、ゲルク派の僧院において、僧侶が般若学の課程で必修とされるテキストの一つで

『善説心髄』では、両学派の空思想解釈を説明する中で、両学派による幻（māyā, rgyu ma）の譬喩の解釈についての議論が示される。仏典では、教説が様々な譬喩によって説示されることがよくみられ、幻は最も多用される譬喩の一つである。当然ながら、同一の言葉による譬喩であっても、思想的立場によってその譬喩が示す意味は異なるため、『善説心髄』では唯識派によって三性説が幻の譬喩によって説明されるときのその意味と、中観派の立場における使い方と理解の仕方の違いが説明されている。

以下では、ロサン・トンドゥプ（Blo bzang don grub, 1966-）による『了義未了義善説心髄の密意探求 聖教と正理を明らかにする黄金の鏡[26]』（*Drang nges legs bshad snying po'i dgongs pa 'tshol ba lung rigs gsal ba'i gser gyi me long*）における唯識派による幻の譬喩の解釈部分[27]の和訳を試みる。

§53「輪廻において前に存在していない有情が生じることはない」と説かれたことについての考察

「もし、『解深密〔経〕』に、「依他起は幻のようである」と説かれており、…」云々という意味について、ある者が、『解深密〔経〕』や『〔大乘〕荘厳経〔論〕』などに、「依他起は幻と同様のものである」と説かれており、〔唯識派による〕幻に喩える仕方が、依他起は真実なものとして成立していないものでありながら、真実なものとして成立しているものとして顕れたものが幻と同様のものである、という喩えとその意味の結びつき（dpe don sbyor）によって、依他起は真実なものとして成立している〔ということが〕『解深密〔経〕』と『〔大乘〕荘厳経〔論〕』などの意味であることは不合理であるというならば、過失はない。すなわち、中観派による喩えとその意味の結びつきのように、依他起は真実なものとして成立しないものでありながら、真実なものとして成立しているものとして顕れたものが幻と同様のものであるというのは、喩えとその意味を結びつけるべきではないが、この唯識派の学説では、色などの外界対象として成立していないものでありながら、外界対象として成立しているものとして顕れたものが幻と同様のものであるというように、喩えとその意味を結びつけるべきであるからである。すなわち、〔唯識派の学説における〕喩えとその意味を結びつける仕方において、真実なものとして成立していないものでありながら、真実なものとして成立しているものとして顕れたものが幻と同様のものであ

ある。非常に難解なテキストであることから、今日に至るまで多くの学僧によって注釈書が著されており、特に唯識思想に関する注釈が多いことが注目される。本レポートで扱う資料もその一つである。

[26] 本書は、セラ・メ学堂のゲシェであるロサン・トンドゥプ師によって著され、2019年に初版がメ学堂で出版された『善説心髄』の唯識思想部分に関する注釈書である。メ学堂では、『善説心髄』の注釈書を含め、ケードゥプ・ゲンドゥンテンパタルギェ（mKhas grub dge 'dun bstan pa dar rgyan, 1493-1568）による教科書が主に使用されるが（西沢[2011: 584, 588-589]）、今回の調査でメ学堂を訪問した際、販売所に駐在していた僧侶に尋ねたところによると、本書が現在のメ学堂で『善説心髄』を修学する際に最も参考にされている注釈書であるとのことである。以下に用いるテキストは、その際に入手したものである。

[27] インド仏教における三性説とその譬喩の解説については長尾[1978: 223-232]などを、『善説心髄』における当該箇所の原文と和訳については片野[1998: 206-209]を、ツォンカパによる幻の譬喩の解釈についての詳細は根本[2017]を参照。

り、分別知の思い込みの基体（zhen gzhi）として自らの特質によって（rang gi mtshan nyid kyis）成立していないものでありながら、自らの特質によって成立しているものとして顕れたものが幻 (286) と同様のものであり、色などの外界対象として成立していないものでありながら、外界対象として顕れたものが幻と同様のものであり、人我として成立していないものでありながら、そのような〔人我として〕顕れたものが幻と同様のものであるなど、多く〔の表現が〕あるので、例にする仕方に依拠しているというのである[28]。

また、『〔大乗〕荘厳経〔論〕』に、

幻のように、虚妄分別〔のあり方〕が説明される。

幻事のように、二つの迷乱〔のあり方〕が説明される。（MSA XI. 15）

と〔説かれた〕意味については、土塊は土の塊である。土塊や木などに幻の呪文が発せられたものは、〔虚妄〕分別において二つの顕れとして迷乱の習気によって汚染されたものに喩えられるので、呪文と〔土塊や木などの〕実物と汚染の力による幻の馬や象としての顕れは、習気の力によって〔虚妄〕分別に所取・能取の二つの離れたものとして顕れたものに喩えられるのである。その喩えの所取・能取の二つの離れたものとしての顕れもまた、思い込みの分別知は、迷乱知と〔虚妄〕分別と説明されるという意味である。また、そのように、

そこにおいてそ〔の本質〕が存在しないように、勝義が主張される。

(287) **それが認識されるように、世俗諦〔が主張される〕。**（MSA XI.16）

と〔説かれた〕意味については、その幻における馬や象としての顕れもまた、幻の馬は馬ではなく、幻の象は象ではないように、〔虚妄〕分別である依他起において、所取・能取の異なった実体として成立しているものとしての顕れたものも、異なった実体として存在していないことが勝義の真実である。〔虚妄〕分別において、所取・能取が異なった実体

---

[28] (285.6) gal te dgongs 'grel las gzhan dbang sgyu ma bzhin du gsungs shing zhes sogs kyi don ni/ kha cig gis/ mdo sde dgongs 'grel dang mdo sde rgyan sogs las gzhan dbang sgyu ma dang 'dra bar gsungs shing/ sgyu ma dang 'dra lugs ni gzhan dbang bden par ma grub bzhin du bden par grub pa snang bar sgyu ma dang 'dra ba zhes dpe don sbyor dgos pas gzhan dbang bden grub dgongs 'grel dang mdo sde rgyan sogs kyi don yin pa mi 'thad ce na/ skyon med de/ dbu ma pas dpe don sbyor ba ltar gzhan dbang bden par ma grub bzhin du bden grub tu snang ba sgyu ma dang 'dra ba zhes dpe don sbyor rgyu ma yin gyi/ sems tsam pa'i lugs 'dir gzugs sogs phyi rol don du ma grub bzhin du phyi rol don du grub par snang ba sgyu ma dang 'dra ba zhes dpe don sbyor rgyu yin te/ dpe don sbyor lugs la bden par ma grub bzhin du bden grub tu snang ba sgyu ma dang 'dra ba/ rtog pa'i zhen gzhir rang gi mtshan nyid kyis ma grub bzhin du rang gi mtshan nyid kyis grub par snang ba sgyu (286) ma dang 'dra ba/ gzugs sogs phyi rol don du ma grub bzhin du phyi rol don du snang ba sgyu ma dang 'dra ba/ gang zag gi bdag tu ma grub bzhin du de ltar snang ba sgyu ma dang 'dra ba sogs mang po yod pas dpe byed lugs la rag las zhes pa'o/ /

としては存在しないが、異なった実体として顕れていることが世俗の真実であると示されている[29]。

また、『〔大乗〕荘厳経〔論〕』に、「六内処が我や命根などとして存在しないように、…」云々という意味については、眼などの六内処が人我として成立していないものでありながら、我として成立しているものとして顕れたものという点から幻と同様のものであり、色などの六外処が人我によって支配される、あるいは受容される我所として存在しないものでありながら、そのように顕れているという点から夢と同様のものであるなど、喩えとその意味が経典に説かれているが、諸法は自性によって成立していないものでありながら、自性によって成立するものとして顕れたものが幻に喩えられている譬喩としては説かれていないと〔いう意味〕である[30]。

---

[29] yang mdo sde rgyan las/

ji ltar sgyu ma de bzhin du/ /
yang dag ma yin kun rtog 'dod/ /
sgyu ma'i rnam pa ji lta bar/ /
de bzhin gnyis su 'khrul ba brjod/ /

ces pa'i don ni bong ba ni sa'i gong bu'o/ /bong ba dang shing sogs la sgyu ma'i sngags kyis btab pa ni kun rtog la gnyis snang 'khrul ba'i bag chags kyis bslad pa dang 'dra la/ sngags rdzas kyis bslad pa'i dbang gis sgyu ma'i rta glang du snang ba ni bag chags kyi dbang gis kun rtog la gzung 'dzin rgyang chad gnyis su snang ba dang 'dra'o/ /de 'dra'i gzung 'dzin rgyan chad gnyis su snang ba'm zhen pa'i rtog pa ni 'khrul shes dang kun rtog 'dod ces pa'i don no; ; yang de nyid las/

ji ltar de la de med pa/ /
de bzhin du ni don dam 'dod/ /
(287) **ji ltar de ni dmigs gyur pa/ /**
de bzhin du ni kun rdzob nyid/ /

ces pa'i don ni/ sgyu ma de la rta glang du snang yang sgyu ma'i rta rta ma yin sgyu ma'i glang po glang po ma yin pa bzhin du kun rtog gzhan dbang la gzung 'dzin rdzas tha dad du grub par snang yang rdzas tha dad du med pa de don dam bden pa yin/ kun rtog la gzung 'dzin rdzas tha dad du med kyang rdzas tha dad du snang ba ni kun rdzob bden pa yin zhes bstan/

[30] yang mdo sde rgyan las/ nang gi skye mchad drug bdag dang srog la sogs par med bzhin du zhes sogs kyi don ni/ mig sogs nang gi skye mched drug gang zag gi bdag tu ma grub bzhin du bdag tu grub par snang ba'i cha nas sgyu ma dang 'dra ba dang/ gzugs sogs phyi'i skye mched drug gang zag gi bdag gis dbang sgyur bya'm longs spyad byar bdag gi bar med bzhin du de ltar snang ba'i cha nas rmi lam dang 'dra ba sogs dpe don sbyar ba mdo sde las gsungs pa yin gyi/ chos rnams rang bzhin gyis ma grub bzhin du rang bzhin gyis grub par snang ba sgyu ma dang 'dra ba'i dper ma gsungs so zhes pa'o/ /

おわりに

今回の調査では、都市部におけるチベット人によるマーケットやチベット人定住地を管轄するインド行政機関から、地方定住地におけるチベット仏教寺院やチベット人の学校、農園、医療・福祉施設にいたるまで、あらゆる側面から亡命チベット人社会を実態を目の当たりにした。報告としては、筆者の調査能力不足により、収集した資料を紹介するにとどまったが、調査の中で再度実感させられたことは、やはりチベット人社会や文化の根幹には、僧俗を問わず、共通して仏教の精神が強く根付いているということである。施設には諸仏・祖師のタンカやダライ・ラマ法王をはじめとする高僧活仏の肖像が掲げられ、真言や礼拝作法を欠かすことがなく、そのような日常生活に溶け込むほどに仏教の教えにならう生き方によってチベットの文化が今日まで紡がれている。

ダライ・ラマ法王がインドへ亡命してから半世紀以上が過ぎ、チベット人を取り巻く環境は、外国人の立場から一見すると、物質的な側面で豊かになっているようにも捉えられるが、チベット人社会の実情や国際社会において置かれている立場は、インド内外にかかわらず依然として緊迫した状況が続いている。このような現実に、筆者はただ安寧を祈るばかりであるが、今回の調査における多くのチベット人との出会いを通じて、仏教の教えを机上の空論にするのではなく、教えの理解を深め、それにならって実践する身となることが大切であるということを、強く心にとどめておきたい。

最後に、今回の調査にあたり同行を快く承諾してくださり、多くのご指導をたまわった名古屋市立大学の榎木先生、本講義の受講生である名市大の学生方、調査の引率およびサポートしてくださったジグメィ・ツルティム氏、リンチェン・ワンダク氏、リンチェン・トンドゥプ氏、調査で出会ったすべての方々に、厚く感謝申し上げます。

参考文献

・Thea Mohr, Jampa Tsedroen, *Dignity and Discipline: Reviving Full Ordination for Buddhist Nuns*, Wisdom Publication, 2014.
・伊藤友美「チベット仏教におけるジェンダー間の平等を求めて：ダライ・ラマ、西洋人比丘尼、国際サンガと研究者」『宗教と社会』14, 2008, 87-105.
・沖本克己, 福田洋一 編『新アジア仏教史 09 チベット：須弥山の仏教世界』佼成出版社, 2010.
・小野田俊蔵「チベットの学問寺」『岩波講座 東洋思想 11：チベット仏教』岩波書店, 1989, 351-373.
・片野道雄『インド唯識説の研究』文栄堂, 1998.
・小西賢吾「僧院と宗教儀礼」『チベットの歴史と社会 下：社会篇・言語篇』臨川書店,

2021,　31-48.
・高松宏寶（クンチョック・シタル）「現代チベット僧院における仏教教学の現状：ゲルク派の教学をめぐって」『現代密教』25, 2014, 103-121.
・チベット中央政権文部省 著；石濱裕美子, 福田洋一 訳『チベットの歴史と宗教：チベット中学校歴史宗教教科書』明石書店, 2012.
・ツルティム・ケサン「チベットの学問仏教」『問答と論争の仏教：宗教的コミュニケーションの射程』法蔵館, 2011, 20-37.
・長尾雅人「三性説とその譬喩」『中観と唯識』岩波書店, 1978, 207-236.
・西沢史仁『チベット仏教論理学の形成と展開：認識手段論の歴史的変遷を中心として』第一巻, 東京大学博士学位論文, 2011.
・根本裕史「ツォンカパの人間観」『日本仏教学会年報』82, 2017, 44-61.
・福田洋一「ツォンカパにおける分別知の構造」『大谷学報』91(2), 2012, 1-29.

5. 次年度受講生へ

インド　フィールドワーク　後輩へのアドバイス

豊田朱理

【調査編】

・チベット語の簡単な挨拶、こんにちは、ありがとう、などを調べておくこと。この一言で相手へのリスペクトを表すことができて印象がいいです。

・質問することを恐れないこと。相手がチベットの何かを説明してくれる立場の人ならば、彼らは私たちがチベットについてよく知らないことを分かっています。だから小さなことでも聞いて問題ないです。私たちは知らなくて当たり前ですから。個人的には、日本で今まで受けてきた受け身的な授業（先生の話を聞くだけで、分からないことがあっても授業を中断しないように自分であとで調べるのがよしとされる教育）と違って、分からないことがあったら何も遠慮せずに聞けるというのはすごく生き生きとした学習ができて楽しかったです。調査で一般市民に聞くときは調査の仕方（どのように聞いたら分かりやすいか、具体的なことが聞けるかなど）をまた別で意識して質問を考えるのがいいと思います。

・とりあえず英語を口に出してみること。英語を流ちょうに使えない場合、英語を口に出すことにためらうことがあるかもしれません。しかしとりあえず口に出してみると、どんな言葉が伝わりどんな言葉が伝わらないのかがわかってくるので英語を使えるようになるには必要なことだと思います。

【持ち物編】

・使える英語を準備しておくこと。テストのためではないので、相手とコミュニケーションをとるための道具を持っていく感覚で英語を準備しておくとより実りある 2 週間になると思います。英語は、パスポートと同じぐらい大事な“持ち物”です！！特に質問力（簡単に Yes, No で答えられるものでいい）をつけること。

・服は上下各 3 着ぐらいで十分です。洗えないので汚れてもいい服で。洗濯はホテルの洗面台で洗剤を家から持って行って手洗いなので、下着と靴下ぐらいしか洗えないと思って準備してください。

・お風呂にはだしで入るのに気が引ける場所があるかもしれないので、サンダルがあると安心です。

・グローバル wi-fi は、ポケット wi-fi とインド用コンセントもついてくるのでお勧めです。写真撮るのと連絡用の LINE 数通で 1 日 600MB で十分足りました。大量に動画をアップロードしたり電話を長時間するのなら足りないと思います（参考に、LINE ビデオ通話 4 分で 300MB 消費）。

次回参加者へのアドバイス

水間玲衣

- 英語力を高めておくことも大事ですが、一番大切なのは、つたない英語でも恥ずかしがらずに精いっぱい伝えようとすることです。
- 現地の人と話すときは、答えにくいあいまいな質問は避けるべきです。何人いますかとか何年働いていますかというような具体的な質問の方がよいと思います。
- どこで撮った写真なのかが後でわからなくなると大変なので、撮った場所がわかるように写真を整理しておくことをお勧めします。
- 訪問予定の場所について、事前にどんな所かを調べておくと訪問した際により深く理解できると思います。
- ノートも、日付と場所を明記しておくと後で見返すときにわかりやすいです。
- 毎晩、その日に気づいたことや調査の進捗などをノートにまとめる時間をとるとよいと思います。
- チベット語のタシデレ(こんにちは)とかトゥジェチェ(ありがとう)はたくさん使える機会があると思うので、覚えておくとより現地の人と交流するのが楽しくなると思います。
- 水に流せるティッシュとビニール袋は多めに持っていくことをお勧めします。
- 洗濯洗剤とハンガーを持っていき、手洗いすれば持っていく服は上下３セットくらいで済みます。

以上

執筆者紹介（執筆順）2023 年 12 月現在

＊は編者

豊田朱理（とよだ・あかり）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科 2 年
水間玲衣（みずま・れい）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科 2 年
淺井教祥（あさい・きょうしょう）	龍谷大学大学院 文学研究科 博士後期課程
＊ 榎木美樹（えのき・みき）	名古屋市立大学人間文化研究科准教授

2023（令和 5）年度
海外学外研修インド：インドの亡命チベット社会

名古屋市立大学人間文化研究科「人間文化研究 H」
／人文社会学部「海外フィールドワーク A」実習報告書

榎木美樹編
2024 年 1 月